

# 剥き出しの人種／性差別主義、対抗の SCRIPT、 変わりゆく世界のなかのトランプイズム

土屋和代

## はじめに

2016年11月、アメリカ大統領選挙という公の場で、平然とイスラム教徒や移民、女性を蔑視する発言を繰り返していたD・トランプが大方の予想を裏切る形で勝利した。トランプの勝利は一体何を意味するのか。本シンポジウムは、アメリカ史、現代史を学ぶ者が避けては通れないこの難問を、政治思想史を専門とするD・グリーンバーグ氏、移民史に詳しいN・モリーナ氏、世界史・国際関係史研究者であるM・アダス氏らが読み解く画期的なものであった。

以下、個々の報告について論点を整理し、コメントを述べる。

## 1. ポピュリズムの流れを汲んだ古保守主義の再来——D・グリーンバーグ氏の報告

2016年のアメリカ大統領選挙が国内外に与えた衝撃の強さから、トランプ大統領をアメリカ史の本流から外れた「逸脱者」として見る傾向は強い。場当たりの政策に首尾一貫性を欠き、それにもかかわらずエスタブリッシュメントへの怒りを巧みに煽るトランプ大統領は一種の「道化師」として見られがちである。しかし、グリーンバーグ氏は、このトランプ旋風をアメリカ政治思想史のなかに位置づけ、「トランプイズム」が実のところポピュリズムの流れを汲んだ、「古保守主義」(paleoconservatism)の再来であったと鋭く指摘する。

グリーンバーグ氏は「古保守主義」が復活する直接的な原因として、三つの要素を挙げた。第一に、大量破壊兵器の保有を理由に2003年3月にイラクを侵攻し、多数の犠牲者を出したものの大量破壊兵器の証拠が見つからず、イラク国内での混乱と長期に渡る占領統治を招いたG・W・ブッシュ政権への幻滅がある。第二に2008年9月に起きた世界的金融危機とその危機への対策として政権が多額の資金援助を打ち出したことへの批判、第三に白人が少数派に転じることが予想されるなか2008年の大統領選挙でオバマが当選し初の「有色の」大統領が誕生したことへの危機感である。

### (1)「カラー・ブラインド・レイシズム」と剥き出しの人種主義

しかし、トランプの排外的な発言が支持された背景をどのように理解すればよいのか、依然として疑問が残った。公民権法成立以降も蔓延る人種主義——E・ボニラーシルヴァが「カラー・ブラインド・レイシズム」と呼ぶもの——については、たとえば、アメリカ政府が貧困撲滅のかわりに犯罪の取り締まりに力を注ぎ、レイシャル・プロファイリングによって有色人種の人びとを逮捕・収監し、彼ら・彼女らを「犯罪者」の名の下に公的な

場から締め出している現状を問うたM・アレクサンダーやE・ヒントンの研究など、既に多くの蓄積がある。<sup>1)</sup> これらの研究が示すのは、公民権法成立以降犯罪、貧困、福祉、インナー・シティといったことばが一種の「コード・ワード」となり、カラー・ブラインドな言説の下で人種主義が再編されている状況である。モリーナ氏が指摘するように、人種主義は形を変えながら社会の底流に生き続けているのではないか。トランプ政権誕生によって露呈したのはそのポリティカリー・コレクトな覆いが取れたことではなかったか。アメリカでは過去三十年間に富の偏在が進んだ。2010年の所得上位層五分の一の世帯所得は全国民の所得の47%を占める一方、底辺層五分の一の所得は3.8%に過ぎず、しかも上位と下位の不均衡は拡大している。<sup>2)</sup> こうした格差社会のもとで、明日の生活への不安と変わりゆくアメリカ社会への危機感を抱いた人びとのあいだで、剥き出しの人種主義が顔を出したのではないだろうか。

## (2) ジェンダーのスク립ト？

二点目として、ジェンダーの視点から眺めた場合、2016年の大統領選挙はどのような意味を持つのか、という点も重要である。「ガラスの天井」を打ち破り、「初の女性大統領」となることを目標に掲げていたクリントンは破れる一方で、トランプは幾度にも渡りセクシュアル・ハラスメントで訴えられ、選挙中も女性蔑視発言を繰り返しながらも勝利した。<sup>3)</sup> モリーナ氏の「人種のスク립ト」という言葉を援用するならば、どのような「ジェンダーのスク립ト」が双方の陣営により描かれたのだろうか。CNNの出口調査によれば白人女性の52%がトランプに票を投じた（クリントン支持は43%）と言われている。<sup>4)</sup> トランプ支持者の女性たちは、なぜ露骨な性差別発言を行うトランプを「我々」の側とみなし、クリントンを「彼ら」——「エスタブリッシュメント」——とみなしたのか。そしてそのことに先に挙げた経済的な不安や人種主義がいかに関係しているのだろうか。

## (3) 変わりゆく世界情勢のなかで——トランスナショナル／グローバルな視座から

三点目として、トランプズムを変わりゆく世界情勢のなかでどのように捉えるべきかを

---

<sup>1)</sup> Michelle Alexander, *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness* (New York: New Press, 2012), 2; Eduardo Bonilla-Silva, *Racism without Racists: Color-blind Racism and the Persistence of Racial Inequality in America*, 4<sup>th</sup> ed. (Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 2014), 3, 16; Elizabeth Hinton, *From the War on Poverty to the War on Crime: The Making of Mass Incarceration in America* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2016); Kazuyo Tsuchiya, review of *From the War on Poverty to the War on Crime: The Making of Mass Incarceration in America*, by Elizabeth Hinton, *Journal of American History* 104, no. 2 (September 2017): 569–70.

<sup>2)</sup> サスキア・サッセン著、伊藤茂訳『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理——不可視化されゆく人々と空間』（明石書店、2017年）、52頁。

<sup>3)</sup> “Donald Trump’s Long Record of Degrading Women,” *New York Times*, October 8, 2016; “Here’s the List of Women Who Accused Donald Trump of Sexual Misconduct,” NPR, October 20, 2016.

<sup>4)</sup> “Exit Polls: 2016 Election Results,” CNN, accessed October 30, 2017, <http://edition.cnn.com/election/results/exit-polls/national/president>.

考える必要があるように思う。ナショナリスティックで排外主義的な勢力が勢いを増しているのは、アメリカだけではない。2016年10月にはイギリスが国民投票の結果EUから離脱することを選び、今年春に行われたフランス大統領選挙ではトランプに共鳴し「フランス第一」を掲げた国民戦線のマリーヌ・ルペン (Marine Le Pen) が首位を争った。日本も例外ではなく、安倍政権の下での特定秘密保護法、武器輸出の解禁、集团的自衛権、共謀罪など軍事化の流れが進む一方、在日コリアンの住民に対する排外主義の高まりが社会問題となってきた。こうした右傾化、排外主義の高まりのなかにトランプ政権誕生をどのように位置づけたらよいのか。社会学者のS・サッセンは、資本のグローバル化、及びそれを支える技術・市場・金融の革新と政府の政策によって、世界各地で極端な不平等が生みだされ、人びとが経済や社会、生物圏から「放逐 (expulsion)」されていると指摘する。この「放逐」の過程は、一見各国固有の現象のように見えるが、実際は各々の政治体制や領土を横断する破壊的な力として機能していると。<sup>5)</sup> この「放逐」の過程とトランプ主義の誕生が一体どのように関係しているのか、検討する必要があるのではないだろうか。

## 2. 人種のスクリプト——N・モリーナ氏の報告

モリーナ氏の報告は、特定の集団を周縁化し、差別する論理がいかにか他の集団に対しても利用されてきたか、そしてその際、いかに「過去」の事例が参照されてきたかを示すものであった。人種やエスニシティについて語る時、研究者はどうしても集団ごとの歴史を語りがちである。1960年代の社会運動の結果、社会史がアメリカ史のなかで主要なフィールドとして現れ、「エスニック・スタディーズ」が学問分野として成立したことを考えれば、各集団の固有の歴史、文化を描くことには大きな歴史的意義があった。しかし一方でこうした集団ごとの歴史は、集団間の繋がりを見えなくしがちである。モリーナ氏の研究は、集団ごとの歴史を参照しつつもそれを乗り越え、人種化 (racialization) のプロセスに目を向けさせるものである。つまり、対象は異なっても、「真のアメリカ人とは誰か」——その反転として誰が「他者」なのか——という問題が常に中心的な論点としてあることを示し、「他者」に対してある特定の時代に生み出された「人種のスクリプト」が改編され、他の集団に適用されていく過程を見事に提示している。

### (1) 「過去」の参照——ウェットバック作戦

モリーナ氏が指摘するように、トランプ大統領は2015年6月に出馬を表明してから、アメリカ社会が抱える格差、貧困、不安定さをメキシコ系アメリカ人の責任に転化してきた。「メキシコとの国境に壁を造る」という発言のみならず、長年アメリカに住み、アメリカ経済を支えていても、ビザを持たない数百万に上る人びとを「非合法移民」として摘発・送還することを掲げた。2017年9月にはジェフ・セッションズ (Jeff Sessions) 司法長官が「幼少期に米国に到着した移民への延期措置 (Deferred Action for Childhood Arrivals, 通称

<sup>5)</sup> サッセン「グローバル資本主義と〈放逐〉の論理」、258頁。

DACA)」を廃止すると表明し、これにより「ドリーマー」と呼ばれる、親とともに国境を渡り正規のビザを持たない移民となりながらアメリカで就学・就労していた80万人の人びとが、先の見えない不安定な状況に置かれることとなった。

トランプ大統領は、選挙戦中から「強制送還部隊 (Deportation Force)」という名称の政策を通して「不法移民」の強制送還を断行すると宣言した。この「前例」として言及されたのがアイゼンハワー政権下で行われた、正規のビザを有していないメキシコ系の労働者を強制送還する「ウェットバック作戦 (Operation Wetback)」であった。モリーナ氏は報告のなかで1930年代大恐慌時の強制送還について説明しているが、この「ウェットバック作戦」については(著書『アメリカでいかに人種が形成されるか』のなかでは言及しているものの)触れていない。<sup>6)</sup> 1950年代の「ウェットバック作戦」がトランプ政権下の「強制送還部隊」の構想にどのような影響を及ぼしたのか、関心と呼ぶところであろう。

## (2)「カウンター・スクリプト」の行方

モリーナ氏は、社会のなかで周縁化された人びとがつくり出す対抗言説を「カウンター・スクリプト」と呼ぶ。黒人やメキシコ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、イスラム教徒の人びとは、人種化されるプロセスを共有しているからこそ、その「似ているけれど、同一ではない (similar, but not identical)」経験を繋ぎ、連帯に変えていく可能性を有しているとも考えられる。グリーンバーグ氏が指摘する「古保守主義」型の、露骨な差別発言を繰り返すトランプ大統領が誕生したことで、共闘の可能性も増したと言えるのかもしれない。モリーナ氏は最後に我々の「未来が繋がっている」ことを指摘するが、今日のアメリカでどのような「カウンター・スクリプト」が考えられうるのか、関心を抱いた。たとえば、白人警官による黒人青年への残虐行為を問い糾し、大量投獄社会のあり方を問うブラック・ライヴズ・マター運動<sup>7)</sup>、ブラック・ライヴズ・マター運動との連帯を表明し、「ジェンダーの公正さは人種の公正さであり、経済的な公正さでもある」と宣言するウィメンズ・マーチの運動<sup>8)</sup>、及び繰り返されてきたセクシュアル・ハラスメントを白日の下に晒し、「私も (#Me Too)」と起ち上がったサバイバーたちの告発が思い浮かぶ。排外主義、人種主義、性差別と闘う運動としてどのようなかたちがあるのか、そうした人びとが描く「カウンター・スクリプト」にはどのような可能性が残されているのか、考えさせられた。

## 3. ベトナム戦争の遺産——M・アダス氏の報告

アダス氏の報告は、米国史上初めての「敗戦」となったベトナム戦争がいかにアメリカ

<sup>6)</sup> Natalia Molina, *How Race Is Made in America: Immigration, Citizenship, and the Historical Power of Racial Scripts* (Berkeley: University of California Press, 2014), 112–38.

<sup>7)</sup> Keeanga-Yamagata Taylor, *From #BlackLivesMatter to Black Liberation* (Chicago: Haymarket Books, 2016).

<sup>8)</sup> Artisan, *Why We March: Signs of Protest and Hope—Voices from the Women's March* (New York: Artisan, 2017).

に孤立と衰退をもたらしたかを浮き彫りにするものである。つまり、国外ではアメリカの威信の低下をもたらす一方で、国内では戦況が悪化していったにもかかわらず楽観的展望を繰り返した政府への不信を国民のあいだに生んだこと、帰還兵と反戦運動家、労働者階級とエリート層とのあいだに深い亀裂を生み出したこと、アメリカの利害が脅かされない限り泥沼化する恐れのある紛争に関わることを躊躇・自制する考え——「ベトナム症候群」を後遺症として遺したのだ。

### (1) 選択的介入主義と「古保守主義」

アダス氏は、著書『計画的な優位』のなかで、ベトナム戦争の遺産とともにソ連邦の解体以降アメリカが「唯一の超大国」となったことが今日のアメリカの対外政策に大きな影響を及ぼしたと指摘する。<sup>9)</sup> アメリカは、冷戦の終結以降、紛争が起きた際に国連を後ろ盾に介入する一方で、もしそれが国益に照らして重要度が低い、またはベトナム戦争のように泥沼化する恐れのある時には撤退する、という選択的なかたちで他国に介入を進めてきた。グリーンバーグ氏が指摘するように、トランプ政権の誕生が「古保守主義」の復活を意味しているのだとすれば、それは今までの選択的な介入のあり方にどのような影響を及ぼすのだろうか。

### (2) ベトナム反戦運動の影響

また、ベトナム反戦運動はその後のアメリカ社会にいかなる影響を与えたのか、という点も検討の余地があると思う。歴史家のS・ホールや油井大三郎が指摘するように、ベトナム反戦運動は、当初は少数の人びとによって始められた抗議行動が、学生から主婦、知識人、政府関係者、退役軍人まで幅広い層に拡大し、北ベトナムや南ベトナム解放民族戦線による抵抗に影響を受けながら、デモや集会のみならず請願や徴兵令状を燃やすなど多岐に渡る手段を用いて世論を変え、政治を変えた「稀有な例」であったのではないか。<sup>10)</sup> 反戦運動の視点からベトナム戦争の遺産を考察すれば、多様な立場に立つ人びとが内部に差異を抱えつつも「反戦」という点で結びつき、国外の運動家と連携しながら、アメリカの「帝国性」に釘を刺し、その後の政治・社会運動のあり方を変えた戦争でもあったと言えるのかもしれない。

## おわりに

本シンポジウムにおける三報告は、「現在」が形作られる際「過去」がいかに参照される

<sup>9)</sup> Michael Adas, *Dominance by Design: Technological Imperatives and America's Civilizing Mission* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006), 398–99.

<sup>10)</sup> Simon Hall, *Rethinking the American Anti-War Movement* (New York: Routledge, 2012); 油井大三郎『世界史リブレット125 ベトナム戦争に抗した人々』(山川出版社、2017年)。

か、そして今アメリカで起きていることを理解する上で過去に立ち戻ることがいかに重要かを、各々の視座から明らかにするものであった。歴史のなかに〈今〉を位置づけることは—その位置づけ方が問われることは言うまでもないが—現代のアメリカを理解する第一歩となるはずである。「トランプ時代のアメリカ」に歴史学がどのように対峙すべきか、幾通りもの道筋を示す知的刺激に満ちたシンポジウムであった。